會報

昭和十二年五月 | 66 | 日本山岳會

三つの報告

I

一行二名、三月十一日札幌を發ち、敷香岳(一三八〇米)及びアルカリ澤三角點(假標一一五〇米)に登頂二十七日歸札しました。

澤が長く複雜なるため相當の困難を豫想し一週間の露營を準備致しましたが、造材事業が案外進捗し居るためキャンプの要なく造材小屋より日歸りしました。

樺太廳林業課に打ち合せの上、十五日敷香着、日本人絹パルプ會社、及び林務署に便宜を依頼し、馬橇にて上敷香より敷香川を溯行第二支流三双の人絹直營事業所にお世話になりました、十九日敷香岳登頂、二十日アルカリ澤三角點に登る、この日は快晴で間宮海峡をへだてゝ沿海洲まで見る事が出來ました。

三月の天候は山間部ではあまり好くないと聞きましたが、私達は山に入る前後一週間連續の快晴に惠まれました。

山に入つてから二〇キロ位は樺太名物の山火事の跡ですが、それから奥はタンネの美林が續き、屈曲した深い谷間より驚くべきコントラストをなしてゐる無名の頂を見るなど、カナダの風景を想はせました。一面の枯木の林の山火の跡も一寸惡くなく、途中作太郎と言ふ小さな峠道からは、はるかなる幌内の原野の彼方に東北山脈が實に美しく輝いてゐました。

澤は幌内河口よりビッチリ氷結し馬橇もその上を行く次第、一帶にブレーカブル・クラストをなしてゐるためラッセルなく、造材小屋から敷香岳まで四里の道も明るいうちに往復しました。シーデポーは案外低く一〇〇〇米位、澤の中にさえ小さな雪庇を見ました。溫度は零下一〇度より二〇度位、札幌の嚴冬を思はせました。敷香岳頂上にては正午頃零下二十一度でした。

最後に、地圖は航空寫眞測量要圖二萬五千分及び五萬分が發行されてゐますが、等高線は全く不正確でありませう。尙四十九度二十分以北は最近秘圖となり少なからぬ不便を感じました。

北大山岳部　岡彦一

II

最近の商大山岳部の狀況を簡單に御報告します。

○奥又白谷より前穗高岳

一行(小谷部全助、森川眞三郎)

昭和十一年十一月廿七日　德澤入り

廿八日　奥又白谷下方へ幕營、

廿九日　德澤へ荷物をとりに往復。

三十日　小谷部調子良くなく森川單獨にて奥又白の池を經て前穗高に登頂。

十二月一日　滯在。

二日　德澤へ下る。三日　下山。

前穗高東南面のヴァリエーションルートをやる豫定であつたが、體の調子を害したものあり目的を果し得ず。

○北岳バットレス(第一、第四尾根)

一行(小谷部全助、森川眞三郎、望月達夫、大塚武、日江井正巳)

十二月二十三日　望月　大塚、日江井出發す。

二十四日　夜叉神峠へ荷揚げ。

二十五日　大曾利——蝮平小屋

二十六日　池山釣尾根の池附近に第一天幕設置。

二十七日　荷物運搬。

二十八日　三名にて第一天幕より北岳登頂。(往復十三時間)。小谷部、森川第一天幕へ來る。

二十九日　第二天幕設置の爲の荷揚げ　大塚所用の爲下山

三十日　池山釣尾根二九五〇米突の地點に第二天幕設置。

三十一日　吹雪の爲滯在。

昭和十二年一月一日　同じく滯在。

二日　小谷部、森川は北岳バットレス第一尾根の登攀に成功す。出發より歸幕迄十六時間)望月、日江井間ノ岳に登頂。

三日　滯在。望月、日江井下山

四日　バットレス第四尾根の偵察

五日　第四尾根の登攀に成功す。(出發より歸幕迄十時間)

六日　第二天幕撤收。

七日　第一天幕にて休養。

八日　第二天幕地へのこした荷をとりに往復、後第一天幕を撤收し蝮平へ下る途中夜となり露營す。

九日　蝮平小屋に至り更に大曾利へ

十日　大曾利——甲府。

去る昭和十年十二月には北岳バットレス第三、第五尾根に登攀し今回の擧によつて第二尾根をのこし他はすべて成功する事が出來た。

○鳥海山

一行(先輩、村尾金二、岩崎利一)

一月二日——八日

吹浦より入り大平小屋を根據とす五日頂上を目ざしたが直下にて天候急變せし爲斷念す。

尙この冬には槍ケ岳へも一隊出たが病人の爲途中よりひきかへす。又冬期合宿は例年の如く乘鞍岳にて行ひ參加者十六名にて好結果を納む。

○遠見尾根より鹿島槍荒澤奥壁

一行(小谷部全助、森脇芳之、小林重吉、森川眞三郎、鷲崎雄四郎大塚武、宮城恭一)

三月十五日　遠見小屋附近に第一天幕設置。
十六日　十七日　吹雪滞在。
十八日　全員小遠見下迄荷揚げ。
十九日　滞在、スキー練習。
二十日　大遠見に第二天幕設置。
　三名第一天幕へ下る。
二十一日　荷物運搬。三名は下山。
二十二日　小谷部、森脇、森川、大塚第二天幕を出發しカクネ里に下り更に天狗尾根二三〇〇米附近に第三天幕設置。森脇、大塚は第二天幕へかへる。この日浪高山岳部員の遭難あり。救助に盡力す。
二十三日　第二、第三天幕共休養。
二十四日　二十五日　二十六日　吹雪滞在。
二十七日　晴れたるも烈風、滞在
二十八日　森脇、大塚第二天幕より五龍岳へ登頂。小谷部、森川荒澤奥壁北稜へ。午前五時發。北稜の中途にて遂にビヴアークせるも天候悪化せる爲止むなく夜半十二時再び活動をはじめ、天狗尾根小舍岩へは二十九日午前四時半着。
二十九日　假睡後第三天幕へ下る。
三十日　滞在、休養。
三十一日　第三天幕撤收。
四月一日　第二、第一天幕撤收、全員下山す。

尙當部では昭和十年九月より同十二年三月に至る部の活動を纒め近く「針葉樹第九號」として發刊する豫定であります。

東京商科大學　一橋山岳部

Ⅲ

此の頃、この國の登山界は正に「遠征時代」を現出し、最近はエキスペディションを論じなければ山を語る資格なきものと考へても餘り的はずれでない、それは山へ登る者の常識とさへ見える樣になつて來た。此の事は或る意味からして誠に悦ばしい事だ。私達もヒマラヤへの關心は常に懷いてゐるし、又過去に於ても持つて來た。そして、それの實現に就いては嘗つて部員が眞面目に努力してもみた。私達のヒマラヤへの熱情は、他の、山へ關心を持つ多くの人々のそれと少しも劣らないものと考へて居る。だから最近、我々が永い間秘かに希望して居たところの堂々たる遠征隊を日本から送らうと云ふ具體的な計畫があると云ふ事を耳にする時、私達の悦びは一層大きなものとなつた。

けれども我々山岳部と云ふものは山を愛し、山に登り其處に生活を送る事を一つの大きな悦びとする者の集りであつて、一方特殊な社會層を成す、學生登山者達の中に在る山岳團體の一つである。此處に我我として考へねばならない問題の出發點がある。自分達の屬して居る特殊な位置、その特殊性を沒して行動する事は多くの場合誤つた方向に向ふ事になる。「遠征」はこの國の登山界一般の問題として、今日は最重要な問題であらう。その必然性は外の國の登山發達史が現實的例證として如實に物語つて居る。現段階に在る我登山界にとつて、「遠征」に對する積極的な關心と研究の是非を論ずる樣な事は、その事自體誤りである。だが我々の部乃至は學生登山層の問題はこの「一般」に對する「特殊」なものとして考へらる可き性質のものであらう。此の關係の基礎の上に立つて始めて山岳部＝登山學生層の本邦登山界に於ける存在意義が把握され、同時に私達の「遠征」に對する態度も決定的な指標を其處に見出し得るのではないか。

本學山岳部は、部員構成上の特殊性からして三年程前から「合宿登山」の形式を採つて來た　合宿登山乃至は集團登山と云ふ形式即ち全部員が一つの山行を行ふ事は既に私達以外の多くの學校で行はれて居ると思ふが、多少共その內容を異にして居ると考へる。私達の場合、或る特定な山に登る必要なために多くの者が行を共にするのではない。又特殊な遠征形式の登山を試みる目的を持つて行ふのでもない。夫等は私達の場合はむしろ合宿の附隨的目的となる。根本の目的は全部員が一定の組織の下に協同の生活を送り、その間に於てお互ひの登山技術と登山生活の內容の質的向上と、各自の山に對する考へ方に付きお互ひに論議し合ひ、充し合つて行くといふところにある。それは言ひ換へれば各自の山登りの內容をヨリ廣く豐かにし、一方自分達の生活一般と山登りを確り結合させる事である。

地方的に分散した學校で山登りの基礎を作つて來た者は、山の經驗にも、技術にも、そして當然の結果として自己の山登りに對する考へも各種各樣なものとなつて居る。そう云ふ連中が、僅か三年間協同の生活を送らねばならないと云ふ條件の下に在る私達にとつて、一つの部として登山に特殊性を持たせるには、他に適當な方法が見出し得なかつたのであつた。そして又私達の今迄の山登りがともすれば自分達の現實の生活から遊離した山登りのための山登りである事が多く、自己の山登りを唯一のものと過信すると云ふ大きな缺點を持つ。併しそれでは現在の樣な登山界の情勢に在つて、最早山岳部の積極的存在意義を見出し得ない。山岳部は山登りを通してヨリ深いものを攫み出して行く樣に進まねばならないのであつた。

此の樣な意圖の下に行つた數回の合宿を經驗して我々はある新しい自覺を持つた。それは我々の間に山登りに對する內的反省が、今迄如何に爲されてゐなかつたか、であつた。だが此の登山に於ける「思想の貧困」は、我々の缺點であると同時に、この國の登山界の一弱點でもある樣に思はれる。我が國の登山界のレベルが一帶に低調なりと云はれる原因も此の登山者達の無思想性にその一つを求められるのではないか。此の事は山登りを山登りとしてのみ考へる事に原因して居る樣に考へられた。我々の偉大な先蹤者達は、一つの人生觀に迄反映する樣な深い思想をその一歩々々の實踐の中に創り出して行つた。私達の望むところの山登りも、その樣な生活一般と正しく統合された山登りであつた。それは、現實に於ける我々の社會生活を、山登りに迄擴張する事に依つて爲し得、亦其處に於てこそ登山が我々の生活を豐かにして與れる意義が見出されると思ふ。

×　×　×

今春は、部員が全部揃つて暇な時を得られない事と、今迄採つて來た合宿の唯一つの缺點である、登山經驗の不足（即ち廣く山を知ることに多少の缺陷がある）を補ふために、數個の隊に分割した、分散登山を行つた。

第一班は三月二十三日から月末迄の豫定で白馬の鑓温泉から猿倉小舍に通ずる道の峠に當る通稱双子岩と呼ばれる處に天幕を張り、杓子の壁並に鑓の東尾根を登る事にした。結果は天候悪く登攀の收獲は皆無、唯だ晴れ間に杓子澤右岸の三次郎平や小日向山の斜面で春のスキーを享樂したのみであつた。

露營に就いて、天幕は直後十尺のアークチツクテントを用ふ。天幕地は双子岩の杓子側約二尺堀り下げ雪を踏み固めて建設した。入口は小日向山側。バティーは五名、建設日は

豫定よりおくれて二十五日。その後二日間の吹雪のため三分一程埋る。天幕の布地の寸法とフレームの寸法とが一致しなかつたためか、布地が内側にたるみ、天幕内がやゝ狹くなつた。パンブー社製フレームは撤收迄の間三本折れた。保温は非常によく、石油コンロ一個で+25°Cを示す時多し。通風筒はH型式煙突を用ふ、成績良好、入口は絞り式、マットは普通のカポックマットを使用したが、三、四日で水が浸み成績不良特に春は不適當と思ふ。我々は今迄に冬季、春季、並に强風の時と、雪に全く埋沒した時と經驗したが、此の式の天幕では常に安全な生活が出來る。器具として改良の餘地ありと思つたのは、シャベルであつた。我々の使用したアルミ製品は不完全ですぐ使用不能となつた。多少目方をかけても丈夫な鐵製品を使ふ方が良いと思ふ。

今度の旅は、目的の登攀には失敗したが、雪中露營が殆ど常識化し夏の生活と大差ない迄になつた事を自覺した事は一つの收獲であつた。双子岩附近は、スキーに良く、又日歸りの岩登りとして色々と興味あるルートもあり、春山の短い生活には捨て難い良さを持つた場所である。猿倉小舍から一時間半乃至二時間半で到着出來、その滑降も又素晴しい處と思ふ。（以上渡邊記）

第二班、南アルプス縱走のパティーは三名で、遠山川を溯行し聖、兎から赤石を經て遠く三伏峠まで計畫を立てゝゐたが、勝手の惡い南の事とて先づ人夫に惱まされついで豫想以上に豐かな積雪量に驚きすべてに於いて思ひがけない苦闘を强ひられた。下栗の部落を二十一日に發つて鮮天島から西澤の出合、聖平、兎岳の北の鞍部、百間洞とテントを移動し小澁川を下つた。豫定を短縮して此の旅を終へるのに約二週間近くを要してしまつた、就中聖岳の上り下りは正月に富士の大澤で經驗したよりも、遙に惡い氷雪狀態であつた。これは福川一杯に散亂する怖るべきデブリと共に吾々の最も嫌外として驚歎すると共に興味を抱いた事實であつたが、今年の南就中その南部一帶に亘る例年にない大雪の話を聞くに及んでこれは單にアブノルマルな事象にすぎないと知つていさゝか失望したのである。

用具についてはなるべく輕い樣にテントは夏用のものにフライを縫ひつけ、炊事具寢具其の他一切第一班が用ひたものを分割使用して見て別に差支へはなかつた。

第三班はわづか二名で槍平へ入る事になつた、四月も七日になつてやつと出發し十日に槍平の小屋に入つて十三日槍に十四日瀧谷の第二尾根を登攀して十六日に引き揚げる間快晴に惠まれ快適な生活を樂しむ事が出來た、瀧谷もかつて早稻田の人々があれほど長く强く戰つた時を想起すれば餘りにも飽氣なく成功を得る事が出來た（尤も瀧谷の中でも第二尾根は最も容易なルートの一つであり四月も半ばではあるが）。

春の山を終へて感じた事は前に渡邊の述べた意味に於ける合宿の最も價値高き事である。吾々は登山經驗の不足を何となく感じて試みに分散の形式を採用し成るべく技術的にも困難な且つは不慣れな未知の山々を求めて散つたのであるが（今初めて感じたわけではないが）、内地の山々や或ひは又そのヴアリエーションルートがかつての人々のそれの如き興味の對象となり得ない事を丹念に經驗せられた樣な物であつた。

廣く山に登る事それは確に山を知るに最もいゝ方法である。併し僅か三年と限られた大學生活中にどれ程の廣さにまで山登りが出來るであらうか、鈍重な天分の登山家が三年間に何程の事がなし得よう、偉大な自然から何を看取し得るであらうか。

吾々は此の時人と人との接觸に多大の期待をかける、その間に山が介在するものと考へるとき合宿なるものゝ最も有意義なるを首肯し得るのではないかと思ふ。

吾々は登山の外面的要素卽ち岩登りだとかスキーだとか氷雪に對するものだとかに就いては決して研究を怠つてはならない、而し同時に吾が國の登山技術一般の水準が高くなつた如く吾々の山岳部のそれも發達したと自信をもつていゝと思ふ。餘りうるさくさう云つた方面の事に沒頭するよりも今吾々の山岳部としてなすべき事は明に他に在ると確信してゐる。（以上釣田記）

東大スキー山岳部

ナンダ・デヴイの一挿話

英米合同隊がナンダ・デヴイ第四キャンプに屯して居た日、——昨年八月二十七日のこと、オデルとヒューストン兩名は前進して露營して居たのだが、この朝上の方からそのオデルのヨーデルが樂しそうに聞えて來るのを聞いて一同はさてもう頂上をやつつけて歸つて來たのかとよく耳を澄ますと、それどころか、正にSOSの叫びなのだ。驚いた一同がテントから飛出してカーターが大聲で怒鳴つた處、オデルから返事があつた "Charlie is kil'ed" ヒューストンが死んだといふ——それではオデルも怪我位はしたに違ひないといふので、一同驚いて難場を息せき切つて登つたのである。露營地點へあと三十ヤードといふあたりから見ると氷斧が二本ぽつねんと突立てられて居る——不吉な豫感がスーツと通る。

その瞬間テントから聞えた聲は、「やい、お茶を持つてるか？」といふ聲ではないか。驚いたことに二人ともそこに居る。さつきの叫びは、"Charlie is ill" だつたのだ。昨夜猛烈な食傷でヒューストンが腹痛を起したといふわけだつたのである。この行でティルマンは酸入器は勿論、ピトンからクラムポンまでメカニカル・エイヅは何一つ借りなかつたと豪語して居るが、さすがに今後小型無電機だけは是非携行なくてはならんといふことになつたそうだ。（TS生）

◇圖書紹介◇

The Alpine Journal No.254 May. 1937

ティルマンのナンダ・デヴイ登攀シプトンの同地方踏査、バウワアのシツキム遠征、ウィースナーのウォディントン初登攀、獨墺山岳會のコーカサス等さすがに昨年度の大ものを集め盡した觀を呈して居る。

その中でもティルマンのナンダ・デヴイとバウワアのシツキムとは始めて詳しい報告に接するだけに非常な興味を持つて讀まれる。しかもこの二つがいづれもポーターを最少限度にとどめる小パーティでありながら輝しい業績を擧げて居る點注目に値する。

ナンダ・デヴイの場合は險惡なりシ峽谷溯行の際既にドーティアルのポーター達の不服に遭つて相當辛い思ひをしたが、更に第一キャンプ設置後シェルパ七名の中二名だけしか上方キャンプへ進むことを肯んぜずその二名のパサンとニマ・ツェリングはその後前者は雪盲、後者は病氣で第二キャンプに七日間寢る始末、結局C1、C11を除く他の作業は全

部サヒブ達がやらざるを得なかつたのである。この困難を克服して登頂したことに對して、ティルマンはこの文中で「シエルパの事故が果して障害となつたか否かは一概には云へない。むしろ彼等の居なかつたために危險なルートをたどる時邪魔物がなくて幸だつたとも云へる」と批判して居る。

この止むを得ざるポーター拔きの登攀に比してバウワア一行のシツキム遠征隊の場合はバウワア自身がこの文の冒頭で聲明する通り、最近の大部隊の遠征が果してヒマラヤ巨峯を征服する方法かどうか、三四人の登山者が最少限のポーターを連れて出掛けた方が費用も少くて濟むのではないかといふ考慮の下にその實驗として四名のメムバーに、四名のポーターといふ思ひ切つた小人數で出掛けたのであつた。その他に目的として、ナンガパルバット第四回登攀へのリーダーの養成とそのための裝備、糧食、メトーデの檢討を兼ね、更に最初から美峰シニオルチユウム登攀をも志して居たといふ野心滿々たるものであつた。一行は猛烈な惡天候の中をよく動き、遂に九月二十三日ウキーンとゲツトナーとはシニオルチウムの頂に立つことが出來たのであつた。この時も氷河以上は一人のポーターも使用して居ない。

期せずしてこの二つの輝しい報告はヒマラヤ遠征の形式について一つの問題を提示するものであらう。

ナンダ・デヴイの寫眞もシニオルチウム・シムヴの寫眞も素晴らしいが、グラハム・ブラウン教授撮影のC3—C4間から見たナンダ・コツトの勇姿は立教の人達を喜ばすこと多大であらう。八月末の撮影であらうと思はれるから多分この山麓を日本の一隊が歩いて居たに違ひない。日本に關係のあることではアルパイン・ノーツに日本山岳會がウエストンさんのブロンズ・レリーフを上河内に建設する旨が報ぜられて居る。

その他さすがにA・Jだけに書くことはいくらもあるが、簡單な紹介の筆はこの邊でとどめる（島田）

◇會員通信◇

双六池小屋へ（四月）

大分前の夏の或る夕方おひ〳〵に晴れて行く霧雨の中に見た笠ケ岳の景色や双六池の靜かな樣子は其後も永く印象に殘つてゐたが、此處に新しく小屋が建てられたので行つて見た。

四月十八日（晴）飛驒古川驛から栃尾まで自動車。神坂の冲田氏へよつてさらに小屋の樣子をきき、槍見温泉泊

十九日（晴）左俣岩小屋まで。どうせ晝には着くから、ゆつくり行く皆煙草をのむので何かといふと休んで一ぷくする。

二十日（晴）岩小屋からスキイを穿く（六・四五）。大ノマ乘越（三・〇〇）。荷が重い上に無暗に暑いのでたび〳〵休む。双六池小屋（四・四五）

二十一日、二十二日（雨風）。滯在

二十三日（曇、おひ〳〵に良くなる）。双六岳だのその近くを散歩。

二十四日（晴）先の天候が心配なので笠ケ岳や黒部五郎岳は割愛して烏帽子へ急ぐ事にする。

双六池小屋（六・〇〇）——水晶小屋（一二・〇〇）——野口五郎（四・〇〇）——烏帽子小屋（六・三〇）

この間、水晶からの下りに雪が深くてからだの埋る箇所を僅かスキイを使つたきり、あとは全部擔いで夏路を歩いてゐた有樣であつた。かうなると短いスキイが欲しい。

水晶から東澤を見下して餘程降りて行きたくなる。

春はどの澤ものどかに美しい。みんな降りて行つて見たくなり又登つて行つて見たくなる。

二十五日（雨）兎に角、一度町へ降りやうといふので雨の中を出る。（八・〇〇）。濁小屋で焚火をして少憩。すつかり濡れて葛温泉に着く（二・〇〇）。笹平から細野まで自動車。細野泊。

二十六日（少雨、午後止んだが雲は低くたれてゐる）。今度は荷の少ないスキイも使へる山歩きをしやうと言つてゐたが、この天氣では出かけられない。それに三十日までに歸るとすればもう日もないので晴れたら白馬へ行くことにする。爐邊で煙草をのんだり、子供と一しよにお宮へ行つて太鼓をたたいたりしてゐるうちに一日たつた。

二十七日（曇）一體に寒くなり、老人たちは山は雪になるかななどと話合つてゐる。そのうち雲も切れて來て明日は良さそうに思へたので四時過ぎてから猿倉へ出かけた。

二十八日（晴）猿倉（七・〇〇）——杓子尾根——國境（一二・〇〇）——白馬小屋（一・三〇）

二十九日（晴）白馬小屋（六・〇〇）今年は雪が少ないので先はどの邊までスキイが使へるか、乘鞍の上からしきりに眺めてゐたが、とにかく行つて見ませうと云ふのでそこからスキイをつけて滑出す。ところが案外雪があつて木地屋の上まではけた。平岩（二・三〇）。そこから道がいたんでゐて鳥の手前までしか自動車が行かず、中途まで歩かされた。五時五十分發の汽車に乘る。四谷で今度の最初から同行した細野の丸山與兵衛、鶴喜代兩君に別れる。夕陽の中に白馬連峰は靜かに美しい。もう一度降りて行きたいといふ氣持がしきりにするので、次の計畫、またその次はといふ風に先々の事を考へる。子供をなだめるやうなものであらう。

白馬又は栂池から蓮華温泉の方を通り平岩へ出るこのコースは一日のやさしいスキイのコースとして推薦出來る。ことに汽車が平岩まで開通すればこの方面は一そうさかんになることと思ふ。

今度は雜誌を一册持つて行つて讀んでゐた。月刊文章の增刊「全日本子供の文章」といふのである。これは小學生の綴方を集めたものであるが、一部都會の子供たちの作文にも見られる「文學に中毒した若い教師の『藝術運動』によつたものでもなく、又、『童心の情操教育』などといふやうな「作られた」ものでもないと序文にもあつたが、これらの文章の中には心を打たれるものがあつた。農村や漁村や又は都會の貧しい區域の子供たちの筆になつたものが多く、既に幼少にして生活の重荷を分け擔つてゐるものも少くはないが、却つて、暗く感傷的に陷つてゐる所が無いのである。

私はこれらの文章を讀んでゐるうちに、自分の家の職業（農業）についてどういふ風にやつて行つたらいゝかいろ〳〵考へを述べてゐる尋常六年の女の子にも、又、豆モチをウンと持つて來てくれ、それから「アノスゴイ五十レンパツ」を買つて來てくれとお土產を持つてゐる福島の尋常一年の男の子にも會ひ度い心持さへしたのであつた。（田邊主計）

立山たより

會員諸兄益御健勝の事と存候小生去る十九日大阪出發、春の立山に向ひ候。山麓附近は櫻の滿開、ビジヨウ坂にはイワカガミ、ショウジヨウバカマ等の高山植物咲き亂れ春のアルプスのよさを深く覺え候。ブナ坂

手前よりスキーを用ゐ初めはブナ小屋泊り、翌日は雨にて追分に二泊し次は室堂に假泊。二十四日快晴の雄山に登頂仕り候。北アルプスの遠望を得てカメラを酷使致候、例年の半分とはいへ追分附近にては今尙四〇〇センチのザラメ雪を殘し登山者を喜ばせ居候。（富田健一）

山日記編輯報告

六月上旬。第八輯の新しい山日記が發行の運びとなります。今年度の山日記は嘗つて例のない全編組更えの新版であつて、全く新らしい出發の氣持で編輯され、內容の充實更新に努めた次第です。中央アジア山脈の概念圖四葉、本邦山岳語彙七〇〇語は本年版の新稿

內容と執筆者

暦、七曜表、日月出沒時間一覽表
日記欄、登山經歷表、自由日記欄
住所欄
登山の注意（松方三郎）
山岳氣象（氣象臺）
冬期登山（松方、西堀榮三郎）
應急手當、登山衞生（片山弘）
服裝、用具、食料
登山用品表
登山用食料目錄
地圖使用上の注意（園部茆）
山岳寫眞要項（額田敏）
外國高山百七十座（木暮理太郎）
完登、未完登を區別す、概念圖
中央アジア山系、K2、カンチエンジュンガ、エヴェレスト
外國主要峠高度表（木暮）
本邦山岳高度表（木暮）
本邦峠高度表（木暮）
登山日程表（冠、櫻井、中野、後藤、中村、中司、沼井、竹內、下出、津田、角田）
日程表概念圖（北、中央、南アルプス、秩父、上越境、奧利根尾瀨、氷ノ山、九葉）
山小屋（再調査）
山案內（再調査）
帝室林野局、營林署一覽
全國登山團體一覽
地名解讀
本邦山岳語彙（研究部、高橋）
外國山岳語彙
郵便規定、寒暖計度量衡、日本山岳會會則
雲形圖版（寫眞十二面）

定價　一圓
發賣所　岩波書店

山日記會員割引に就て

山日記は例年の如く會員に對し二割引を以て御頒ちする事になり、豫約申込を募ります。

1　頒價八〇錢（定價一圓）
2　送料　六錢
3　申込は本會事務所宛のこと
4　送料は申込と同時のこと
5　申込期限　六月三十日

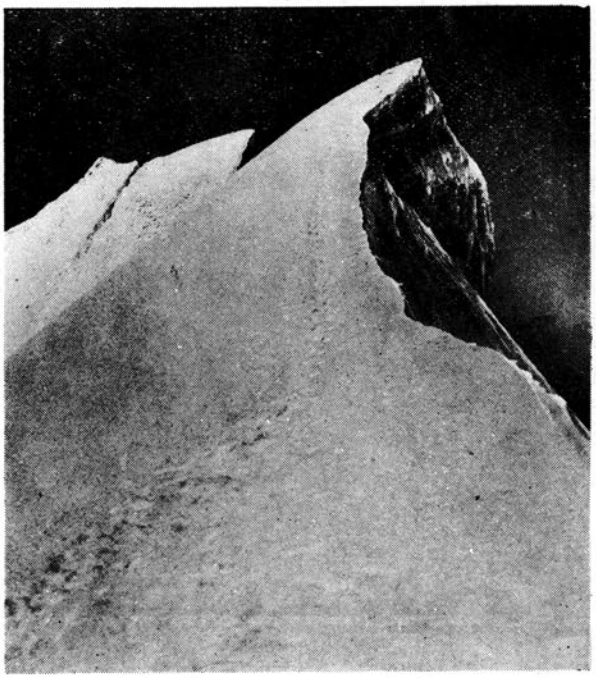
會員としては是非一册はルツクサツクへお收め願ひます。

1937

山日記

三十區地入挿一繪挿　頁〇四四判裁半菊
六〇料送〇〇・一價定　裝スーロクーザレ

日本山岳會編輯



躍進の氣運に滿ち漸く多事ならんとする昭和十二年の登山季節を前にして、新しき「山日記」を以て我が登山界に見えることの出來るのは非常な喜びである。しかし今年の「山日記」を世に送り出すに當つて我々の持つ喜びは、例年と比べて、一層大きい。我々が年來その實現を期しつつあつた懸案の幾つかが遂に今年の「山日記」に於いて實を結ぶに至つたからである。第一に今年版は徹底的に版の組み替へを行つた。過去の「山日記」と比較されるならば今年版の出來榮えの程度が判然りすることと考へるが、この結果今年の「山日記」は全然新なものを作るといふ計劃と意氣込の下に作り上げられた。版の組替の爲めに拂つた犧牲は大きいが、その爲めに「山日記」が言葉通り更始一新するに至つたことを考へれば、その犧牲は充分酬ゐられたと見なければならない。（「山日記」はしがきの一節）

內容概略　暦　日記欄　登山經歷　自由日記　住所欄　★　登山の注意　山岳氣象　冬期登山服裝用具食料　登山用品表　食料品目錄　登山衞生及び應急手當　山岳高度表　峠高度表　外國高山百七十座（完登未完登の細別）　各國の峠　登山日程表　山小屋　山案內　山岳語案（本邦及外國）　山岳寫眞要項　登山團體（本邦及外國）　地名解讀　其他　★概念圖十三枚（日本アルプス・上越國境・秩父・氷の山・中央アジア・K2・エベレスト・カンチエンヂユンガ）寫眞雲形十二種

東京神田一ツ橋　岩波書店　振替東京〇四二六二

會務報告

五月定例理事會

五月十三日午後七時本會事務所

出席　松方、鳥山、横、黒田、高頭、木村、茨木、高橋、櫻井、島田、田口、角田、中司。西堀（委任）小島、木暮、中屋

一、山日記編輯報告
一、山岳編輯報告
一、ウエストン氏記念事業ノ件
一、六月小集會ノ件
一、研究會ノ報告

會員有志晩餐會

四月八日　午後六時半

本郷「麥とろ」に於て

世話人　中村テル、田邊主計、戸塚武彦

はじめ出席の返事が少なかつたので世話人心配してゐたところ、いつも見える顔も揃ひ、又、新しく見えたかたもあつて賑かになつた。部屋の狹いのも却つてしたしみがあつたやうに感じられ、御料理も充分にあり、また、惡くなかつたと思ふ。

いつものやうに自己紹介があつたが、その際松方氏からウエストン氏表彰に就ての經過報告があつた。

次回晩餐會は秋に催される。せいぜい御誘合せ御出席あらん事を希つてゐる。世話人は左の三氏にお願ひすることになつた。

西堀榮三郎
中司　文夫
大熊　保夫

出席者（十九名）

福田嘉四郎　初見一雄　廣瀬　潔
飯塚篤之助　黒田孝雄　加藤泰安
鴨下榮一　松方三郎　西堀榮三郎
中村テル　中司文夫　大熊保夫
酒井忠一　高頭仁兵衛　田口一郎
戸塚武彦　田邊主計　山内豐中
吉田竹志

退會者

昭和十二年五月中

（一三五三）東京市　柴山登茂次

代表者變更

仙臺市北六番町

第二高等學校山岳部代表者　志賀　悌輔

新着圖書

ケルン　五月號　同編輯室
山小屋　同　朋文堂
寫眞月報　同　小西六本店
ツーリスト　同　J・T・B
野鳥　四・五月號　野鳥の會
地學雜誌　同　東京地學協會
登山とスキー　同　發行所
本邦體育運動團體調査文部省體育課
獨逸體育運動の行くべき道　同
學校體育運動管理合理化策　同
坂本直行著　山、原野、牧場
Alpine Journal Vol. XLIX No. 254
American Alpine Journal 1937
Scottish Mountaineering Journal No 123
Journal of the Mountain Club of South Africa No. 39
Geographical Journal Feb. / Apr.
Natural History Mar. / May
Appalachia Mar. / May
Trail & Timberline Feb. / Apr.
The Prairie Club Mar. / May
The Mountaineer Mar. / May
La Montagne Feb. / Mär.
Revue D' Alpinisme No. 1 1937
Rivista Mensile C. A. I. Feb. / Apr.
Die Alpen Mar. / Apr.
Revue Alpine C. A. F. No. 1-2
Bulleti del Centre Excursionista de Catalunya Gen. / Fet.
De Berggids Maart / Mei
Bulletin du C. A. T. Mars / Juin
S. C. F. Mars / Apr.
Planinski Vestnik Mar / April
Unio Excursionista de Catalunya Gen. / Feb.
Unione Ligure Escursionisti Apr
S. T. F. Arsskrift 1937

坂本直行風景畫展覽會

期日　六月十三日——十五日（火）午前十時——午後五時

會場　日本橋　日本商工會館（高島屋裏）

◇事務所から◇

□住所の變更は御通知下さい。
□會費お拂ひ込み未濟の方はなるべく早く願ひます。
□會員通信は事務室内會報掛宛に願ひます。

會報係より

會報がふるはないとのお叱りをうけるかも知れないが、係として精々努力して居るつもりです。しよつちゆう原稿がたまつてれば、月に二部位出すのはへでもないのです。一つ係を困らせる程の原稿を遠慮なくドシ〳〵お送り下さい。前の四月號は二月號から三月を休んで、いきなり四月にとんだので、これも原稿からであつたのです。六月號も今編輯中で二十日頃には出る豫定です。山日記もこの會報の出る頃にはもう顔を出すことでせう。せいぜい可愛がつて下さい。會報と同じように、また兄弟分の「山岳」も豫定ばかりでいつこうに捗らないやうです。これにも是非御支援を願いたいものです。

（D・V・記）

昭和十二年六月　六　日印刷
昭和十二年六月　十　日發行
發行者　中屋健弐
編輯兼印刷者　中司文夫
東京市小石川區戸崎町一三
印刷所　多木印刷所
東京市芝區琴平町一（不二屋ビル）
發行所　日本山岳會
電話・芝・一六四九番
廣告一手取扱　進恒社
電話・四谷・六五四番